保育学文献賞を受賞して(2)

どうしたはずみか家族になって

福田　優子

私たち、子どもを愛育養護学校に通わせた（通わせている）親たちがそれぞれの思いを書き綴ったものが、りっぱな本になって、なんとこのたびメデタクモ保育学文献賞を受賞してしまいました（『親たちは語る』愛育養護学校〔幼児期を考える会〕編、ミネルヴァ書房、一九九六年）。すごいな！　私たち一同とても晴れがましい気持ちです。ありがとうございます。へらへらとよろこんでいたら、幼児の教育の編集の方から受賞にあたって何か書くように言われ、浮かれていたのでひきうけてしまいました。

「親たちは語る」なんてなかなかいかめしい題ですが、障害のある子を育てている家族のよもやま

ばなしです。この本に寄稿しているほとんどすべてのおかあさんと、私は愛育養護学校で一緒でした。障害のある子を育てていく大変さというのは、人それぞれでしょうが、自分の子どもをなかなか可愛らしいと思えないのが、大変といえば一番大変なことです。つわりを乗り越えお産を乗り越え、さあこれからかわゆいかわゆい赤ちゃんをママが育ててあげまちゅからね、なんて甘い感傷もつかのまの夢で、気がつくとほかの子とは一風変わった子の世話にあけくれているのです。

よその子は公園でみんなと砂遊びをしているのにどうしてうちの子は屋根にのぼるんだろう。どうしてうちの子は呼んでもふりむかないんだろう。どうして電車ばっかり見ているんだろう。どうして激辛スナックしかたべないんだろう。どうしてこんなにストローを切るんだろう。どうしてどうしてどうして……。

自分の子どもがこの先どうなっていくのかわからなくて、心配ばかりしてすごしていた私たちにとって、同じ悩みを持つ仲間がいるというのは何よりも大きな支えでした。

わが子の、言葉にならないきんきん声にうんざりして、予測できない行動にいらだって、あーあ、この子を産まなければ良かったなんてふと

思ってはひどい自己嫌悪におちいって。こんな気持ちをひとりぼっちで抱えていたらとても子どもなんて育てられなかったでしょう。私たち母親だって神様じゃないもの。

「母性愛なんてね、十分寝足りている人たちの幻想よ」なーんて、みんなで笑い飛ばしてみると、ちょっぴり元気になれるのです。そうしてなんだかんだ言いながら、わたしたちは運命にずるずるひきずられて、一筋縄ではいかない子どもと暮らし続けているのですよ。それでも、一つ屋根の下で十年以上暮らしていると、生活のこつのようなものが子どもにも親たちにもそなわってきます。

「成長」なんて、そんなたいそうなものではないんです。顔をつきあわせているうちにだんだん馴染んできた、というくらいのものです。

障害のある子どもを十五年以上育てている私の友人たちは、結局子どもというのはなるようにしかならないのよね、と口をそろえていいます。子どもというのはその子の勢いにまかせるしかないんだなってことが納得できると、親も子もなんとなく楽になるようです。けれど、子どもが小さい時はそんなにのんきには構えていられません。この子の障害を少しでも軽くするのが母親の義務だわなんて思ってしまう。たとえ障害のことはすんなり受け入れられたとしても、この子のためには最善をつくさねば、なんて思いつめてしまう。ねばならないことなんて何ひとつないのに。そんなに肩に力をいれてたら家族みんながくたびれてしまうのに。

世間のプレッシャーもすごいですね。子どものやりたいようにやらせていると、親なんだからちゃんと躾ろと言うし、鬼のような顔をして夢中で躾まくっていると、親のくせに子どもが可愛くないのかなんて言われて、どーすりゃいいんだよーって泣きたくなっちゃいますよね。手は出さずに口だけ出すやからの多いのなんの。困った時

にただそっと手を貸してくれる人がどれほどありがたいことか。助けてくれなくたっていいのです。妙にはげましたり尊敬したりせずに、当たり前の顔をしてそばにいてくれるだけで、どれほど気持ちが落ち着くことか。

あら？　ということは子どももそう思っているのかしら。見通しがたたずに混乱している時は説教されてもなぐさめられてもうるさいだけですものね。大人は見守ることしかできません。いつかきっとひとりで立ち直るのだから。

私はただの母親で教育者じゃないから乱暴に言い切ってしまいますけれど、よくも悪くも、その子の本質的なものというのは、外からのはたらきかけではあまり変えられないように思います。内側に潜んでいる力を最大限にひきだすという考え方もありますが、潜んでいるものなら、おそかれ早かれ自然に表面に出てくるんですよね。私たちはみなそういう生き物なんじゃないかしら。

変えられない。ひきだせない。それじゃあ親は何するの。何もできないんです。だってなるようにしかならないんですから。運命を自分で切り開くことが大好きなむきには歯がゆく見えるでしょうが、なるようになっていくというのはこれで結構技術がいるのですぞ。

私の娘の彩子は今十六歳になって、今のところは親がほとほと困るような要求はあまりないので、わりとのんきに生活を送れますが、子どもの状況によっては、もう親はへとへとになって子どもが寝ている時だけがくつろげる、なんて人も多いでしょう。中には寝ない子もいてホントに困る。親は二十四時間コンビニ体制で緊張していなくてはならず、息つく暇もあればこそです。そういう中で一日をなんとか終わらせるというのはとてもエネルギーのいることです。

愛育養護学校というのはそんな私たちの日常を

さりげなく応援してくれる場所です。そして何よりも子どもの生活の場です。この国では矯正を前提にした訓練や学習の場はありがたいことたくさんあるのですが、子どもがその子らしく生活できる場はとてもとても少ないのです。将来のよりよい生活のために奮闘努力をかさねて、将来がこないうちにくたびれちゃったらどうするの。子どももたぶん大人も、自分で意識している以上に精一杯に生きているような気がします。だからもっと目標を高く持てなんて言われたらみんなこわれちゃうよ。

愛育で育った子どもが、すっきりとした大人になるかどうかは請け合えませんが、ただここの子どもたちは自分をこわさない方法をよく知っていて、自分が生きやすい環境を整えるためには実に熱心に努力をするのです。はじめはあきれていた母親たちも、子どもたちが切実な思いで、与えられた「生」を守っていることに気がつくと、なんだかとってもあっぱれだなあなんて思えてくるのです。

彩子は目をさますとおたからをかかえて居間の所定の位置にじんどり、こだわりの食事をして、好きなテレビ番組だけを見て、出かけられる場所にだけ出かけ、好きな人とだけまじわり、程々で勝手に切り上げ、スーパーでは赤い蓋のふりかけと黄色の蓋の換気扇クリーナーを買い、ハンサムな青年に出会うとじっと見つめ、救急車のサイレンに絶叫し、赤ちゃんを喜び、大相撲を楽しみ、午後五時になると「おかあさんといっしょ」にチャンネ

ルをあわせ、冷蔵庫をあけてこだわりの食事の指示をし、またまたおたからを全部抱えて寝室にひきあげ、ムーミンのビデオを見て、私に主題歌を歌わせ、なぜかこのごろは新メニューとしてブルース・スプリングスティーンをボリュームイッパイにして聞き惚れ、私が音をしぼるとバイバイをしてあっちに行けといい、つまらなくなるとわあわあ騒いで誰かを呼び、大人たちが寝るといつのまにか眠りにつきます。

えーっと、どこが努力でどこが切実なんだといわれると困るのですが、彩子にとっては、こうしてこつこつとつくりあげている毎日の生活そのものが生きる目的であり、成果でもあるのです。

『親たちは語る』に寄稿した私たちは、あいかわらず親子して世の中の流れからはかけはなれたところであっぷあっぷともがいておりますが、まあこれでいいんじゃないかって思えるところから、家族って始まっていくのだと思います。

お互いにとんちんかんだから親子して空回りばっかり。押したり引いたり、泣いたり泣かせたり、怒ったり笑ったりしながらなんとか一日をやりすごしていく。それは幸せとか不幸とかの言葉ではくくれない、まして哲学でも教養でも社会貢献でもない、もっと単純でささやかな生活の営みです。

どうしたはずみか家族になって、はずみのついたまま一緒に暮らし、この先どうなるのかちっともわかりません。ホップな生活とはこのことかしら。それでも私たち、夫も私もそして彩子もこんな毎日が結構気にいってるみたいなんですよね。

（愛育養護学校家庭指導グループ）